

# 私の宝箱

## 「犬と過ごす時間」 金子 里美

早いもので、私が犬を飼い始めて三年が過ぎた。その間大きく体調を崩すこともなく、今のところ健康でいることに感謝している。

犬を飼い始めて、私の生活が大きく変化したのは、散歩という歩く機会が出来たこと。自分よりも、犬を優先すること。よく人に声を掛けられることなどがある。

声を掛けられる理由は、私の散歩している姿がとても滑稽だからだと思っ。なぜなら、二匹はカートに乗せ二匹はリードを付けて歩くという状況だからだ。つまり、四匹と一緒に散歩しているのだ。一人で散歩する時は、安全を考えると二匹を歩かせるのが限度の為、このような散歩の仕方になった。途中で二匹を交代させ、約一時間歩いてくる。

よく散歩中に、「四匹もいるの?」「大変ね!」と声をかけられる。確かに四匹は多い方だと思うが、それには経緯があるのだ。まず犬を飼い始めたきっかけは、友人に「自分のことよりも優先しなくてはいけない物を持ち、与えられるのではなく、与える側になってみたら、人間的な成長があるかもしれない。」と言われたことが、一匹目を飼った始まりである。二匹目は、留守が多い為淋しいかと思ひ増やした。

三匹目は、二匹目をかう際店頭と一緒に、その後ハケ月間もペットショップにいたのが気になり少し安く買った。四匹目は、三匹で遊んでいる姿を見て偶数の方がいいかもと勝手に考え現在の四匹となった。ここまで来ると、自分自身馬鹿だなとつくづく感じる。

飼い始めて思うのは、一匹一匹私達と同じように個性があることである。好奇心旺盛な犬、のんびりマイペースな犬、神経質な犬、怒られてもへこまず尻尾を振る犬が家にはいる。それぞれに、いろいろな可能性を持っているため、それを伸ばしていけたらいいとは思いますが、私の現状ではそこまでは出来ていない。犬たちは、言葉を発することは出来ないが、何かを訴えてくる眼の表情や、体の動きを見て可愛いと思えることも多い。また、名前を呼んだ時に真っ直ぐ私に向かって走ってくる姿に、いとおしさを感じる。

最近ではペットも家族化してきており、家族の大切な一員となっていることが多い。しかし、その裏で様々な問題も感じる。例えば、日本でのペットの売り方や法的立場。また、業者を管轄する専門の役所もなく、日本におけるペットに対する意識はまだまだ低いように私は感じる。

今まで動物に対して何の関心もなく意識もとても低かった私が、自分が守らなくてはならない犬を飼うことで、責任と命の大切さを学び、自分の中の関心や意識が広がったように思う。

(あすか看護師)

## 絵本の世界

### 「ぼくにげちゃうよ」

真木 希

私が子供の頃、二歳下の弟と夢中になって母親に読んでもらっていた記憶があります。

ある日、子うさぎは母さんうさぎの元から離れてみたくになります。「ぼくにげちゃうよ」と庭のクロッカスやヨットになってみて逃げる例え話をします。すると、母さんうさぎは庭師になり、風になって追いかけて行くよ話します。

子供の頃は、子うさぎと母さんうさぎの情景が、挿絵を見なくても色鮮やかに想像できました。子うさぎのドキドキ・ワクワクした気持ちも、まるで自分自身が逃げ出そうとしているようにも感じられました。時には、「私、にげちゃうよ!」と、母の反応を楽しんでいたこともありました。母は、母さんうさぎのように、「どこまでもどこまでも追いかけていくわよ!覚悟しなさい!」と少し乱暴に言っては、私達を笑わせてくれました。

最近では、五歳の息子のお気に入りの一冊となっています。彼も、子うさぎが逃げ出そうとしていく

「ぼくにげちゃうよ!」のフレーズが大好きで、ワクワクした表情で夢中になって聞いています。そんな彼の目には、私の目に映った同じ情景が広がっているのだろかなと感じられ、大人になった私には少し羨ましく感じる瞬間です。

子供の頃と違うのは、母さんうさぎの「だって、おまえはとってまわいいわたしのほうやだもの。」という気持ちが分かるようになってきたことです。大人になって二度目の楽しい時間を過ごせた一冊となりました。

でも、絵本の母さんうさぎよりは、めんどくさがりな母なので、「ママがにげちゃうよ!」と、息子から逃げ出してしまおうか!と思う瞬間もあり、母さんうさぎって、すごいなあ...と感心してしまったりもします。

(こだま看護師)



ぼくにげちゃうよの絵本